

2023年1月22日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書14章10～21節

説教題：愛を貫かれる神

バンクーバーには、2つか3つ、ユダヤ教の会堂が建っている通りがあります。私は「現代のユダヤ教では『過越しの祭り』をどのように守るのか」、興味がありました。「過越しの祭り」というのは、「イエス様の時代から1300年ほど前、エジプトで奴隷であったイスラエルの人々が、神に守られてエジプトから脱出することになった時、羊の血が家の門柱と鴨居に塗ってあるイスラエル人の家は、『死の天使』がその家を過ぎ越して、血の塗っていないエジプト人の家の長子だけを撃った。その混乱に乗じて神の民イスラエルはエジプト脱出に成功した」、その出来事を記念して祝う祭りです。英語では「Passover」と言います。カナダで売られているカレンダーには「Passoverの日」が書いてあるので、その日にユダヤ教の会堂に忍び込むようにして入ってみました。イエス様の時代には、「過越し」を祝うために、人々は神殿に羊を連れて行って、祭司に屠ってもらい、ある部分を犠牲として献げ、残りの部分を家に持って帰って、家で焼いて、1頭の羊を家族10人くらいで食べました。私は「会堂の中で羊を屠っているのではないか」とチラッとそんなことも思いましたが…。中に入ったら、1人の人が私を見つけて礼拝堂に案内してくれました。礼拝堂では、ラビを中心に皆で聖書を読んでおられました。食堂らしき部屋を覗いたら、「羊を屠る」等という雰囲気は全くなく、何脚も置かれたテーブルの上には綺麗に食器がセットされていました。会堂で一緒に「過越しの食事」をするのかも知れません。いずれにしても、「過越しの祭り」はしっかりと守られているようでした。

今日の聖書の箇所は、イエス様と弟子達が「過越しの食事」をする、そのことを描いている記事です。今日もこの箇所から「聖書内容」と「メッセージ」と、2つに分けてお話を致します。

## 1. 聖書の内容～全てを用いて愛を貫かれる主

14章12節に「種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日に、弟子たちはイエスに言った。『過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか』」(12)とあります。イスラエルでは夕方に1日が始まりますのでややこしいのですが、私達のカレンダーで言えば木曜日です。木曜日の午後には羊を屠り、木曜日の夜(ユダヤではもう金曜日)には、それを「過越しの食事」として食べるのです。イエス様が十字架につかれるのは金曜日です。十字架が迫っています。その時にイエスは弟子達と一緒にエルサレム市街にある一軒の家の二階座敷で「過越しの食事」を取られました。イエス様はエルサレムの郊外ベタニヤにおられたのですが、律法によって『過越しの食事』はエルサレムで取らなければならないということになっていました。そこでイエス様も、エルサレムに「過越しの食事」をとる場所を用意されました。イエスは弟子に言われます。「都にはいりなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。そして、その人がはいつて行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる』と言いなさい。するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をきなさい」(13～15)。これがどのような意味なのか、いや、例えば「水がめを運んでいる男によって弟子達はその場所に導かれて行くこと」に何か意味があるのか、良く分かりません。しかし、いずれにしてもイエスご自身が—{恐らくその家の主人は、イエス様の弟子(隠れ弟子)の1人で、その主人との事前の話し合いがあったのでしょ}—そのようにして、12弟子と一緒に「過越しの食事」を取る場所を用意して下さったのです。

そのような舞台設定の中で、しかしこの箇所が中心的に取り上げるのは「ユダの裏切り」です。イエス様の12弟子の1人に選ばれたイスカリオテのユダが、イエス様を裏切って行くのです。そしてイエス様は、弟子達との「最後の晩餐—(過越しの食事)」の席で「ユダの裏切り」を語ら

ざるを得ない。非常に辛い記事ですが、この記事は、何を伝えるのでしょうか。

10～11 節に戻ります。「ところで、イスカリオテ・ユダは、12 弟子のひとりであるが、イエスを売ろうとして祭司長たちのところへ出向いて行った。彼らはこれを聞いて喜んで、金をやろうと約束した。そこでユダは、どうしたら、うまいぐあいにイエスを引き渡せるかと、ねらっていた」(10～11)。宗教指導者達は、この段階でも「イエスを殺すのには、まだ時期が早い」と思っていました。「人々がたくさん集まっている『過越しの祭り』の最中にそういうことをすると、騒ぎを引き起こすことになるかも知れない」と考えて躊躇していました。その時にユダがやって来て、密かに、捕らえ易い状況でイエスを捕らえる、そのために協力することを申し出るのでした。

ユダが、どうしてイエス様を裏切ろうとしたのか。聖書は「金銭的な理由だ」と言います。平行個所の「マタイ 26 章」で、ユダは祭司長達に「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか」(マタイ 26:15)と言います。ただ、それが主な理由だとしても、それだけの理由ではなかつたろうと思います。例えば、良く言われる次のような説明があります。「ユダは、イエスが(いわば)超自然的な力で革命のようなものを起こして、ローマに支配されている今の世の中を何か変えてくれることを期待した。ところが、イエスは全くそのような方向には動かない。それどころか、イエスについて行ったら、自分の命までも危なくなるような雰囲気すらある。そこで、期待が大きかっただけに失望も大きく、腹を立てて、イエスを裏切ってしまった。あるいは、業を煮やして、『イエスが何らかの行動を起こさざるを得ないような状況』を作ろうとした」。そういう説明です。そうだったのかも知れませんが、もちろん、はっきりとは分かりません。ただ、事実として、彼はイエス様を売り渡してしまうのです。

イエスは、それを知っておられました。そして「過越しの食事」が始まった時に「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります」(18)と言われます。弟子達はこの言葉を聞いて悲しみます。イエスが「裏切ります」と言われた言葉は、「引き渡します」とも訳せる言葉です。それは、イエスがこれまで「ご自分の受難」について語って来られた時に使われた言葉です。{「これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです…」(マルコ 10:33)}。弟子達の耳に残っている不吉な言葉を、また使われました。弟子達は、これまでの「イエス様の受難予告」と重ね合わせて心を痛めた—(悲しんだ)—のかも知れませんが、しかも「12 人の 1 人が裏切る」と言われるのですから、ことは一層深刻です。

しかし不思議なのは、その悲しみ—(混乱)—の中で、彼らは、回りを見回して「誰がこの主イエスを裏切るのか、誰がイエス様を敵に引き渡すのか」と問わないのです。問わないで『まさか私ではないでしょう。』とかわるがわるイエスに言いだした」(19)とあるのです。「誰がイエス様を裏切るのか…」と問えないのは、結局「自分はその人間ではない」と確信を持って言える者は、1 人もいなかったということではないのでしょうか。「まさか私ではないでしょう」、皆、自分の心の中に裏切りの思いがあることを見透かされた気がしたのです。というか、彼らは、自分のそういう心に気づかされたのです。だからイエス様に「お前のことではないよ」と言ってもらわなければならなかったのです。しかし、結果的に弟子達は皆、裏切って行くのです。イエス様は、この後 27 節で「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる』と書いてありますから」(27)と言われます。「つまずきます」、これは「腹を立てます」という意味の言葉です。「自分をつまずかせたもの」に腹を立てるのです。弟子達がイエス様を裏切って行く時、彼らはイエスに失望して『何かしてくれると信じていたのに!』と腹を立てた」ということがあったのではないのでしょうか。私達も、実にしばしばイエス様に失望し、イエス様に腹を立てる、色々な理由をつけてイエス様を否定する、そういうことがあるのではないのでしょうか。

さてしかし、この弟子達の裏切りの中でも、イエス様の御心は壊れて行かないのです。イエス

は「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます」(21)と言われます。ユダは裏切ります。そしてユダの裏切りによって、イエスの十字架は、この翌日には現実となります。その十字架が成る時、他の弟子達も—「たとえ全部の者がつまずいても、私はつまずきません」(14:29)と言い切ったペテロも—イエスを否定する、裏切るのです。しかしイエスは「自分について(聖書に)書いてあるとおりに、去って行く」と言われる。つまり「神の御心に従って」ということです。弟子達の裏切りにもかかわらず、というか、裏切りさえ用いて、主は御心を貫いて行かれるのです。そして十字架に架かられます。人々の罪を贖い、私達に、神に至る道、永遠の命に至る道を作るためにです。しかし、それが見えない弟子達は絶望します。しかし、十字架は復活に繋がるのです。27節の「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる』と書いてありますから」(14:27)は、28節「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます」(28)の言葉に繋がるのです。弟子達は、イエス様が死んでしまった絶望、それ以上にイエスを捨ててしまった自分自身に対する絶望、そのようなものに打ちのめされて、「もうダメだ、終わりだ」と思っていたかも知れない。でも、彼らが絶望しているまさにその時、イエスは、先にガリラヤへ行かれ、たった今イエスを裏切って、イエスを捨てて逃げ帰って来たばかりの彼らを、待ち受けておられたのです。そして、そのイエスとの出会いによって、弟子達はもう一度立ち上がって行くのです。いや単に立ち上がるというのではない、復活のイエス様との出会いによって、立ち上がらされて行く。復活のイエスの命に生かされ始める。言葉を換えると、彼らは、本当の意味で救われ始めるのです、救われるのです。

ユダは、どうなって行くのか。「マルコ福音書」は、「イスカリオテ・ユダは、12弟子のひとりであるが」(10)と書くのです。「12人のひとりであったが」とは書かない。それは、ユダが裏切った後も、イエスはユダを弟子として招いておられたからです。しかしユダは、結局、悔い改めない、立ち帰らない。イエス様を売ったことを後悔して、死んでしまうのです。

## 2: 聖書のメッセージ

この箇所は、私達に何を語るのでしょうか。2つあると思います。

### 1) 愛を貫かれる主に立ち帰る

「弟子達の裏切りも、ユダの裏切りも、イエス様を驚かせるものではなかった。イエス様は、それをご存知であった。そして裏切りさえ用いて救いの御業を為された」と申し上げました。それは、また次のように言うことも出来ると思います。主は、弟子達の裏切りをご存知の上で、その裏切る、裏切った弟子達を、なおも愛し、立て上げ、導いて下さった、ということです。そして私達にとって感謝なことは、その同じ主の愛によって、私達の信仰生活も守られているということです。

私達も、主を否定します。色々な理由をつけて疑ったり、信じることを放棄したり、主の愛に絶望したり、主に腹を立てたり、色々なことがあるのです。私は、昨年鬱の時、主に絶望し、勝手に躓き、腹を立て、悪態をついて、ついには神を激しく責め立てました。本当に恥ずかしいことです。でも、そのような私の信仰でも、この主の愛があるからこそ、なおも守られているのです。信仰というのは、自分1人で必死に信じているのではない。信仰は、神に与えられているもの、恵まれるものです。そして、主に守られ、支えられているものなのです。私達の信仰は、そのような主の深い愛に守られているのです。だから信仰生活を続けて行けるのです。

そうであれば、その私達に出来ることは何でしょうか。ユダの裏切りを、イエスは知っておられました。でも、知っておられたけれども、どれほど悲しく思われたのでしょうか。ペテロがイエス様を否認する時、イエス様はペテロを見つめられます。どれほど辛い思いでおられたでしょう

か。私達がイエス様を様々に否定する時もそうでしょう。どれだけ悲しまれるか。そうであれば、私達に出来ることは、主の悲しみを思い、すぐに悔い改めて主に立ち帰ることではないでしょうか。私達が、神に絶望することを、疑うことを、不信仰になることを—(皆さんにはそういうことはないでしょうか)—主は知っておられ、その上で、それさえ用いて、私達をなおも導いて下さるのです。しかし、だからこそ、その主に帰らなければならない。それが私達に出来ることだと思うのです。主に立ち帰ることのなかったユダは、その後用意されていた素晴らしい祝福に与ることが出来なかったのです。私達が自分の信仰に絶望する時も、主は絶望されない。深い御旨をもって導いて行かれるのです。だから私達は、悔い改め、立ち帰り、また主を信じて行くのです。

## 2) 神の深の御業に信頼する

メッセージの1) と重なるかも知れませんが…。

アメリカにフィリップ・ヤンシーというクリスチャン・ジャーナリストがいます。彼がチェスの名人とチェスの試合をした時のことを、ある本に書いているそうです。彼もチェスが強かった。ところがチェスの名人と試合をしたら、ヤンシーが正当な手で攻めれば、名人はその手を自分に有利になるように利用して次の手を打って来たそうです。ヤンシーがとんでもない手で攻めれば、名人は、それさえも自分の有利になるようにして次の手を打って来たそうです。ヤンシーは「名人とチェスをするというのはどういうことなのか」、それが良く分かったそうです。結局、どんな手を打っても相手の有利にしかならない。神様という方は、そういう方なのです。

弟子達はイエス様を裏切りました。ユダはイエス様を売り渡しました。酷い裏切りをしました。しかし天の視点では、神は、イエスを十字架につけようとしておられました。その視点から見ると、神様は、彼らの裏切りさえ用いて、ご自分の御業、私達に対する救いの御業、愛の御業を為して行かれたとすることが出来ます。つまり神は、良いことも、良く見えないことも、全てを用いて、私達に対する愛の御業を為して下さる方なのです。

繰り返しますが、私達は、不信仰に陥ります。失敗をします。でも神は、それさえも用いて、私達に対する愛の御業を貫いて行かれる、そういう方なのです。「創世記」に登場するヨセフは、兄達の計略でエジプトに奴隷として売り飛ばされます。しかし神は、そこで彼を大臣にしてしまわれます。そして、その世界に飢饉が襲った時、ヨセフは、エジプトの食料を頼ってやって来た自分の家族を救うことが出来たのです。その時、彼は言います。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました」(創世記 50:20)。「新約」にも同じ思想があります。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。

「この『すべて』には、あなたの失敗も含まれる」とある有名な牧師は言いました。失敗の多い私達も、この神が私達の神様だから、どんな時も希望を失わずに日々の暮らしを生きて行くことが出来ます。大切なことは、神の御思いは、私達の思いを超えて深い、神は何があっても、愛の業を貫いて行かれる、神は私達のために働き出して下さる、働いて下さる、そのことに信頼することだと思います。そのことを、胸に刻みたいと思います。